

書評

根立研介『日本中世の仏師と社会』

——運慶と慶派・七条仏師を中心に——

津田 徹 英

本書は日本の中世の造仏界において一大潮流を形成した慶派仏師とそれを取りまく社会について論じた大著である。その構成は以下の通り。

序 論 中世仏師研究序説

附論 十世紀前半頃の仏師動向

第一部 慶派仏師出現以前の仏師と社会

第一章 中世仏師の始まり——僧綱仏師の出現——

第二章 僧綱仏師と仏像製作の場——法印賢円を中心にして——

第二部 慶派仏師の台頭と中世社会

第三章 慶派仏師の形成——院政期の「興福寺」仏師——

第四章 慶派仏師工房の組織——運慶を中心にして——

第五章 南都再興造仏における「中国」美術の受容と慶派彫刻様式の形成

附論 後白河・後鳥羽院政期の古仏の使用をめぐる

第三部 中世後期以降の仏師と社会

第六章 慶派仏師の末裔たちの動向——東寺大仏師職をめぐる——

附論 康正工房の仏像製作をめぐる——桃山時代七条仏師の工房製作——

第七章 「運慶」タヒヒテ天下復タ彫刻ナシ——運慶の名声の伝承をめぐる——

結 び

本書評では各部の中心をなす論文の内容の紹介も兼ねたいが、膨大な史料の解説

根立研介『日本中世の仏師と社会』

に立つて提示された根立氏独自の所見も多い。そのため、後述のように、はやくも反論が提示されたところもある。そこでここでは、どこまでが史料を押さえての事実であるのか、どこに根立氏独自の解釈があり、それが今後どう議論の対象になっていくか、それらのことがらを念頭に置きつつ及んでみることにしたい。

本書は、序論と結びを新たに書下ろすとともに、既出の論文を加筆・訂正し、三部に分けて章立てを行い構成する。評者は個々に論文として発表された時にいづれも一読しているが、その抜刷を頂戴し論考に接し得た折、とくに鮮烈な印象と感銘を受けたのは第一部第一章の「中世仏師の始まり——僧綱仏師の出現——（初出は副題をタイトルとする）」であった。冒頭において永長元年（一〇九六）に京洛で異常な盛り上がりを見た仮装パーフォーマンス「大田楽」について記した大江匡房撰『洛陽田楽記』の記事のなかに、大田楽に参加すべく御所から繰り出す異形の扮装で着飾った公卿の団に続く仏師と経師の集団に着目し、かれらが貴族に準じる身分であったことを看破する。とともに、そのなかの仏師たちが僧侶の位階である僧綱に叙されて順次「法橋」「法眼」「法印」の肩書きを得る過程で高位の僧侶に準じる身分として社会的に位置づけられ、そのことで権門の造像を行い得る身分となり、権門の発願になる造像に駆りたてられるようになったことを明解に論じている。論文初出時の読後の感銘と印象は、いま改めて本書の当該章を読み直しても変わらず納得のゆくものである。加えて、その論考において強烈に印象づけられたのは、これまで日本彫刻史の研究では古代として扱われていた平安後期を近年の歴史学における史観を踏まえ中世に編入すべきではないかという提言に及んだことである（七九頁）。そのことは本書を著すに際し、新たに執筆された序論の「中世仏師研究序説」でも再説する（一八頁）。ただし、著者自身が認めているように「こうした日本歴史学の近年の時代区分論が日本美術史にそのままではめられると、仏師の祖、和様の大成者、あるいは寄木造りの大成者といった言説が繰り返して語られてきた定朝は、場合によると中世仏師、少なくとも古代から中世の移行期に活躍した仏師になってしまふという、日本彫刻史研究者にとって些か当惑する事態も生じる」とするが（七九頁）、その一方で「平安時代と鎌倉時代を峻別する彫刻史の見方は造形的な面からも少し検討し直してよいかと思われる」とも述べている（一九頁）。この「造

形的な面からの」検討については本書では十分議論が尽くされているわけではないが、その言及は根立氏が今後の自らの彫刻史研究についての課題と方向性を示したにも等しい。その構築のためには前人未踏の困難が予測されるが、あえて邁進しようとする氏の決意の表明・宣誓を汲み取ったのは評者だけではないであろう。根立氏の今後の研究動向には目を離すことができない。

さて、本書の副題には「運慶と慶派・七条仏師を中心に」と記すことから明らかなように、中心は第二部と第三部にあり、その主要論考は第三章と第六章ということになる。このうち、第三章の「慶派仏師の形成―院政期の「興福寺」仏師―」は、第一部第一章の「中世仏師の始まり―僧綱仏師の出現―」を踏まえるものであり、その理解なしには成り立たない。また、第六章の「慶派仏師の末裔たちの動向―東寺大仏師職をめぐる―」は仏師ひいては工房の東寺との関わり方が、第三章で論じられた興福寺における仏師・工房の機能を踏まえながら眺めるとき、同じ「大仏師」の称をとまないながらも、性格を異にしていたことが明らかとなる。

根立氏は第三章執筆の意図を「慶派仏師の出身母体である奈良仏師の彫刻史上の位置づけ」の「再検証」にあると序論で解題する(二二頁)。すなわち、これまで慶派仏師の母体は奈良仏師と捉えられ、かれらが生み出し、時代を席巻することになった鎌倉彫刻が奈良という地域で形成されてきたように語られてきたことについて疑問を投げかける。根立氏は、かれらを「奈良を拠点とする仏師として固定的に捉えてよいのか」どうかについて「興福寺」仏師の概念を改めて規定すると共に、かれらが「史料の上では京都での活動をかなり活発に行っていたこと」を確認し「やはり京都の権門と深いかかわりを有する特権化した仏師」である「院・円派仏師」とはほぼ同類の仏師として再評価する(二二頁)。そして、その考察を通じ「興福寺」仏師について、「定朝―覚助に連なる頼助―康助―康朝―成朝という、いわゆる奈良仏師の系譜の仏師たち」は「本来は特定の寺院に所属せずに、私仏所を構えて造仏活動を行う仏師」であることを認めつつ(一五〇頁)、その「始まりは、定朝や覚助のように平安時代後期の興福寺の大規模な再興造営を行うために設置された造興福寺司管下の仏所を統括する大仏師として、造興福寺長官に任命された仏師であったかと思われる。しかしながら、本来再興造営のために臨時に設置されたはず

であるこの仏所は、興福寺の大火が度重なったこともあってほとんどが常設に近い状態になったことにより、次第に寺内工房化していったと思われる。こうした傾向が顕在化したのが、十一世紀末から十二世紀初頭にかけての再興造仏に活躍した頼助の頃と思われる、彼以後、寺内工房の性格を強めていったこの仏所を統括する仏師たちが「興福寺」仏師の呼称で呼ばれるようになったのであろう(二四九頁)とする。ただし「彼らは、形式的には造興福寺長官や興福寺俗別当管下の、いわば官営仏所の棟梁に任命されるのであり、興福寺に専属する仏師とは性格が異なる」(一五〇頁)、したがって「院政期の南京大仏師職は寺家から補任されるものではなく、いわば国家によって補任されたものである」との認識を示して「厳密に言えば興福寺に関わる権益あるいはそれを保持する地位とはいえない」と結論している(一五一頁)。

この結論については本書の刊行を承けてすぐに浅木脩平氏が反論を出されているが(同「院政期の「興福寺大仏師」と大仏師職について」『佛教藝術』二九三号、二〇〇七年七月)、議論の焦点は平安後期の興福寺の修造に従事した仏師とその工房をどう捉えるかにある。

その起点については根立氏が解き明かされたように、永承元年(一〇四六)の火災後の興福寺再興造営にある。ここで根立氏の論述に従い、そこで示された以後の復興事業の流れについて追ってゆく以下の通りである(なお、史料はいずれも根立氏が提示されたものである)。その過程で費用の出所は見逃ごせないポイントになる。そして、まず確認しておかなければならないのは、再興に際して、金堂・回廊・経蔵・南大門などが国費で進められたことにある(『造興福寺記』)。根立氏はこれを「公家沙汰」とされた。すなわち費用の出所を「藤氏長者沙汰」と区別した国家沙汰のことである。そして、講堂と南円堂については奈良時代の創建以来の大壇越である藤原氏嫡家の沙汰(すなわち「藤氏長者沙汰」であった(同))。それぞれの沙汰はいわば興福寺復興事業を費用の出所から分類したものである。そして、この再興事業にかかわって仏師定朝が褒賞として「法眼」位に補任されている(『僧綱補任』裏書)。仏師の中心は定朝であった。ここで何故、定朝が国家から興福寺復興造営を指命されたかといえば、定朝が当時「法橋」位にあり、僧綱制度の下、国

家事業としての参画の要請または義務を負わされたとみるべきことは第一部第一章の議論に立てば納得のゆくものである。したがってその褒章も興福寺復興事業の功績に対してであったことはいうまでもないが、より厳密にいえば国家沙汰の事業に対する功績を認めてのことであつたといえよう。根立氏というように、もとより定朝は当時、京都において私工房を構えていたとみなされ、この国家沙汰に際して、造興福寺長官や興福寺俗別当管下の、いわば用意された官営仏所の棟梁にかれが任命され、ひとり派遣されたとみるよりは、定朝を指導者とするかれの工房に興福寺再興事業の修造が委嘱されたとみることができる。このことについては、浅木氏が補足されたように定朝指揮・監督下にあつて使い慣れない官営仏所の仏師を動かして復興事業を行うよりは、日ごろから使い慣れ、定朝自身が率いる工房の仏師たちをそのまま起用する方が、信頼する技術力の確保と能率面において確かに説得力がある。当然、仏師定朝はこの大規模な興福寺再興修造の任務遂行にあたつて、京都にあつた定朝工房の出張所というかたちで配下の仏師を奈良に引き連れて工房を興福寺に構えたということになる。それが『造興福寺記』に言うところの「造仏所」「御仏所」に相当しよう。そうとみると、ここで問題となるのはその出張所の施設・建物を仮に国家が全額面倒をみて提供したとしても、この箱モノに組み入れた丸抱えの定朝工房を、造興福寺長官や興福寺俗別当管下の官営仏所と見なし得るかどうかである。これが最大の争点となろう。

なお、このとき併行しておこなわれた「藤氏長者沙汰」による修造に起用された仏師については知られないが、国家による委嘱を機に「藤氏長者沙汰」についても定朝工房に委嘱された根立氏は推定する（二一七頁）。したがって、このときの復興事業にもなう仏像の修造は定朝工房において専ら行われたことになり、ただ金堂分、講堂分というように、それぞれの事業に対する経費の出所が違つていたということになる。このように興福寺「造仏所」「御仏所」を捉えるならば、根立氏が注意されたように「律令体制下の造仏所は当然官営の工房である」という前提が崩れていることは明らかであり（一一八頁）、いわば定朝工房に再興造像が委嘱され、その出張所が興福寺に設けられて維持運営費用において国家沙汰と「藤氏長者沙汰」が相乗りするかたちとなつていたことになる。すると、極論するならば、造興福寺

司の責務の範囲は国費分で賄われている事業についてであつて、「藤氏長者沙汰」分については、藤氏長者が監督・検分する立場にあつたと解する余地もありそうに評者は思うが、そのあたりの議論の深化は今後に委ねられよう。

続く康平三年（一〇六〇）の大火にあつては同五年に造興福寺長官の任命が知られる（『公卿補任』）。すなわち、国家沙汰の復興造像はその頃から着手されたことになるが、治暦三年（一〇六七）三月二十五日にその功労を認めて仏師定朝の子息とみられる覚助が「法橋」の位を叙されていた（『僧綱補任』裏書）。ただし、再興造像自体はその後も続いていたことは塔と西金堂の供養が承暦二年（一〇七八）正月二十七日であり（『扶桑略記』『興福寺略年代記』）、北円堂と食堂の供養が寛治六年（一〇九二）正月十九日に行われたことから窺える（『後二条師通記』『為房卿記』）。この間の寛治元年二月には東金堂が焼失し（『歴代編年集成』）、同二年には僧房東堂が（『百練抄』）、同六年には東室僧房が焼失する（『興福寺略年代記』）。したがって復興事業の長期化は仏師工房の継続を示唆し、康平五年（一〇六二）の着工以来、三十年の間に及んだことになる。なお、仏師工房の統率者であつたとみられる覚助はその途中の承保四年（一〇七七）十月に没していた（『承暦元年十二月法勝寺供養記』）。

さらに、四年後の嘉保三年（一〇九六）九月二十五日の大火により、金堂・講堂をはじめとする主要堂宇が焼失する。この時の再興造営は金堂が国家沙汰、講堂と南大門が「藤氏長者沙汰」であり（『中右記』康和四年十月二九日条）、さらに「寺家沙汰」分もあつたという（『同』康和四年十二月二九日条）。ちなみに、この再興供養にかかわつて仏師頼助が「法橋」に補任されている（『僧綱補任』裏書）。ここに三十年に及ぶ再興造営事業に際して興福寺における出張所（「造仏所」「御仏所」）内で定朝、覚助、頼助と世代交代がなされて事業が継承されたことになる。その劈頭に位置する定朝は京都に本拠となる工房を構えていたとみられることから、興福寺のそれは本来、出張所（支所）であつたが、三十年にわたる存続はそのまま独自に工房として成長を遂げたと考えるのが自然であり、根立氏は上述の結論において「本来再興造営のために臨時に設置されたはずであるこの仏所は、興福寺の大火が度重なつたこともあつてほとんどが常設に近い状態になつたことにより、次第に寺内工房化していったと思われる。」（二四九頁）とされている。

その後、平重衡による治承四年（一一八〇）十二月二十九日の南都焼き討ち後の再興修造まで興福寺における国家沙汰の事業は窺い知ることができない。根立氏がいうように「造寺司は造営が終われば廃止されるのが一般的であり」（一一八頁）臨時に設置されていた造興福寺司は廃止されたとみるのが自然であろうが、その間も興福寺内における藤氏長者や院の発願造営が記録から確認でき（一二〇頁）、「藤氏長者沙汰」あるいは院沙汰の造営にともなう造像があったことに根立氏は注目する。すなわち、永久四年（一一一六）三月六日に供養をみた藤原忠実発願の春日西堂の四方四仏の造像に頼助と康助が従事したことが知られ（『殿暦』『僧綱補任』裏書）、定朝以後、覚助、頼助のあとを承けて、かの工房を康助が引き継いだことが窺える。このことは『吾妻鏡』文治二年三月二日条に引かれる成朝言上状において、成朝自らの系譜を定朝―覚助―頼助―康朝―成朝と位置づけ「先師相承連綿無絶」と表明したことも傍証となる。

ところで、これまで、かの仏師工房は根立氏も含めて興福寺内にあったと考えがちであるが、興福寺において造像事業が無い時期に他寺の造像をその工房で行うために、工房は寺外にあったほうが都合がよいとする浅木氏の指摘は評者も留意したい。頼助が他寺のための造像を行った一端は根立氏があげられた『中右記』大治五年（一一三〇）三月二十五日の条に京洛外の藤原宗忠発願の日野新堂に安置する丈六仏像を部材として奈良から運んだと解釈できる記載があることに示されている。このあたりも、浅木氏の指摘を含めて今後議論の深化を期待したい。というのも、もし、工房が寺外に存在したというならば、根立氏がいうように（上述）「興福寺に専属する仏師とは性格がことなり」したがつて「院政期の南京大仏師職は寺家から補任されるものではなく」という指摘とも関わって「厳密に言えば興福寺に関わる権益あるいはそれを保持する地位」にはないとの認識ともどもかえって評者には頷けるからである。ただし、根立氏がいうように、ただちに院政期の南京大仏師職が「いわば国家によって補任されたものである」（二五一頁）と結論できるかどうかは浅木氏がこれに異を唱えられたように議論の余地があるように評者にも思える。しかしながら、評者は浅木氏のいうように「寺家の補任」とみることをすぐ支持するものではない。ほかにも考え得る余地はあろう。興福寺における代々の従

事は仏師・工房側からみれば「興福寺御用」としての意識を育んだものとも考えられ、寺家から専属従事の公認を得ていたかどうかは明確でない（ただし公認を与える立場にあるのはやはり興福寺ということになる）が、この代々にわたる興福寺への従事と、それにともなう「興福寺御用」の看板意識こそ仏師側からの「南京大仏師」という表明であったという見方はできないかである。それを藤氏長者から見れば「御寺仏師」「南京仏師」「興福寺大仏師」「山科寺大仏師」「南都大仏師」と呼び得るものではなかったかどうか。そして、藤氏長者側からの呼称が一定してないことは、寺家からのそれが是認にとどまり、補任というかたちがとられていなかったことを示唆するという考え方もあり得るように評者は思うが、そのあたりも含めて今後の議論の行方を見守りたい。

ちなみに、記録にあらわれた康助、続く康朝の造像事績が専ら京都であることに關して、根立氏は「史料の上では京都での活動をかなり活発に行っていたこと」を確認するとともに、「やはり京都の権門と深いかかわりを有する特権化した仏師」である「院・円派仏師」とほぼ同類の仏師」としての認識を示されたが（既述）、それはまさしく、根立氏が第一部第一章で示されたように、僧綱位の獲得は院や国家造像に参画し得る利権・資格の獲得を意味するものであり、当然、権門からはその要請があり、また、仏師からも積極的にはたらかげがなされた結果であった。そうとみると、治承の焼き討ち後の興福寺復興造像に際して院派、円派を巻き込んだの仏師の選定について根立氏は「興福寺の仏像の修理や造像事業の主要部分を担当した仏師たちの任命には、撰関家と密接な関係を有する造興福寺長官や興福寺俗別当というような官人が事実上の決定権を保持していた可能性が高く、寺家は自らが行うような小規模な造仏や修造はともかくとして、仏師の選考には権限を有していなかったようにも思われる」（二三〇頁）と結論づけられたが、以下のような可能性も今後あわせて検討されていいのではなからうか。

すなわち、この時の復興事業は、根立氏が史料をもつて示されたように、金堂・回廊・僧房・経藏・鐘楼・中門の造作は費用分担が国宛、つまり、国家沙汰の事業であり、その監督者として新たに造興福寺使の人事が行われていた。また、講堂、南円堂、南大門は「藤氏長者沙汰」であり、食堂、上階僧房は「寺家沙汰」であつ

た『吉記』および『玉葉』治承五年六月十五日条)。そして、仏師院尊が講堂・金堂の修造に割り当てられたが、これは何よりも当時、院尊が僧綱仏師の最高位である「法印」にあったことと無関係ではなさそうである。国家側の論理としては国家事業に参入できる仏師は第一部第一章で根立氏が解き明かされたように、僧綱仏師がその任にあたるという論理がそこに働いていたようにも評者には思えるのであるが、そのあたりはどうなのであるか。一方、院尊の独占に対して明円が提出した

言上状には、寺家沙汰での造像なら(御用仏師である)南京仏師が従事しようと言句を言わないが、これが国家事業である以上、自らも僧綱位にあることから事業に参入し得る権利があるという意識が見え隠れしており、後白河院が「明円之所申非無其謂」といったこともその理論に立脚していることという考え方ができないかどうかである。同様に成朝が定朝以来六代にわたる興福寺御用を打ち出してきても、僧綱位になく国家事業に参入の資格を持ち得なかったところから、朝廷をして「成朝事無左右仰」(『吉記』治承五年六月二十七日条)と問題にされなかったとは考えられないかどうか。結局、法眼明円は国家沙汰の金堂の造仏を、法印院尊は「藤氏長者沙汰」の講堂の造仏を、法印康慶は同じく「藤氏長者沙汰」で南円堂の造仏を、無位の成朝は「寺家沙汰」になる食堂の造仏を担当することになったが(『養和元年記』治承五年七月八日条)、成朝の従事は浅木氏が指摘するように、事態を見かねた興福寺が代々の「御用」を勤めた功績に配慮して「寺家沙汰」の食堂における造仏を成朝に担当させたと解し得るならば、仏師の選定に寺家に関わる余地が認められることになる。ちなみに、その折、南大門の仁王像の担当仏師について院尊が朝廷に働きかけて子息・院実の起用を画策したのに対して、寺家側が康慶を起用の意向を示したことについて、根立・浅木両氏が着目された『玉葉』文治五年八月二十二日条に、記主であった藤氏長者・藤原兼実に興福寺別当が堂舎の仏像再興に「京都仏師」が用いられたことの不満を漏らしている事実を思えば、仏師の僧綱位の最高位である「法印」位にあった院尊が無位ながらその御曹子の院実を担当仏師に据えようとする横車に対抗するためには、無位の成朝では国家側の理論に対しての説得力不足であることを寺家は十分承知して、そこで同じく康朝門下で当時「法橋」の位を有して僧綱仏師たる資格があった康慶を用いることを懇望し、そのことで寺

家側が院実阻止を目論んだという見方が成り立たないかどうかである。そして、寺家が康慶を指名したことのうちに康朝門下において康慶と康朝が独自に別々の工房を主宰していたことを窺わせ、このことは第四章の「慶派仏師工房の組織」の議論とも絡むものであるが、とすればそこにも仏師選定における寺家の積極的関わりが浮び上がってくるように思うのは評者だけであろうか。

ところで、根立氏は興福寺仏所の起点となった永承元年(一〇四六)の火災後の興福寺再興造営に際して、国家沙汰で仏師定朝の工房に修造を請け負わせ、国費で賄われた修造分が適切に行われているかどうかの監督機関を寺院に設置する形態の淵源を十世紀初頭の醍醐寺における醍醐天皇の御願造像に求めている。本書の序論に「十世紀前半頃の仏師動向」と題する附論を収載し、醍醐寺における醍醐天皇の御願造像を考察することも、近年の日本歴史学における中世の枠組みを単純に日本彫刻史の研究に当てはめ画期しようとするものではないという根立氏の視点の確かさが窺える。平安後期にあつて僧侶の位階である僧綱位に仏師たちが叙せられたことのうちに、かれらが見た目においても法体(僧侶の姿)で剃髪していたことが示唆されるが、この僧名仏師が寺院に工房を構えて活動していたことが史料によって押さえることができる最古が、十世紀初頭の醍醐寺における醍醐天皇御願造仏であった。

そしてこの附論において根立氏は、醍醐寺と同じく京都・山科の地に所在する安祥寺で新たに見出した四天王像のうちの二体と醍醐寺霊宝館に安置される上醍醐の中院伝来の五大明王像の作風の近似性に着目し、醍醐寺創建期の工房と造仏のあり方に一石を投じようとする。

ここで、まず先行研究で明らかになっていることを整理しておく、以下の通りである。

かの中院五大明王像は、醍醐寺が醍醐天皇の御願寺として整備されてゆく十世紀初頭の作であり、造像には醍醐寺初代座主・観賢の関与が推定されている。したがって、観賢没年である延長三年(九二五)頃には完成されていたとみなされている。この中院五大明王像の造像をやや降った頃から下醍醐においては醍醐天皇の御願堂

である釈迦堂の造像がはじまる。かの釈迦堂の造仏は醍醐天皇の生前には完成をみず、一周忌の追善をかねて開眼が行なわれたが、『醍醐雜事記』や『類聚符宣抄』所載の関係文書に拠り、その造仏事業に際して官の監督機関である御仏行事所が設置されたことが知られるとともに、僧名仏師による造像であったことを記す。しかも、その一人には指導者を意味する「頭仏師」を明記しており、自ずとかれに率いられた僧名仏師集団（ひいては僧名仏師工房）の存在が浮かび上がる。

ところで、上述の中院五大明王像は観賢の私的造像であったが、同じ醍醐寺内で御願造仏と私的造仏が別々の工房においてほぼ同時期に行われたとみるよりは、同一工房でそれらの造仏が行なわれたとみる方が自然なようである。そう考えるとき、かの工房が官の監督下にある官営工房であったと考えるならば、そこで私的造像が行われていたことになり、公的な御願造仏の業務範囲からは逸脱することになる。ここで問題となるのは御仏行事所という官の監督下にあった僧名仏師工房をどう捉えるかである。先行研究においては、国費による造像（御願造像）を請け負い、その分については御仏行事所より監督・検分を受けるとともに、観賢の私的造像であった中院五大明王像を「寺家沙汰」で造像を行ったのが、醍醐寺の僧名仏師工房の位置づけということになるのか。

さて、根立氏は同じ山科の地に所在する安祥寺において見出した四天王像のうちの二体の作風が醍醐寺中院伝来の五大明王像に通じるところから、それらが同一工房での制作であったと看破された訳である。そして、そのことを踏まえて改めて醍醐寺におけるかの僧名工房を再考する。その際、安祥寺の造像には醍醐寺から安祥寺への仏師派遣（移動）を想定されているようである。根立氏は醍醐寺と安祥寺の双方が御願寺であったことに着目し、仏師の派遣（移動）については官営工房組織といった官の関与を想定するのが自然とされた（四八頁）。当然、明言されないが、安祥寺内にも官主導の工房が設置されており、官命により工人（仏師）が醍醐寺の官営工房から安祥寺の工房へと派遣したことを想定されているようである。しかしながら、ここで留意したいのは、根立氏が言及された醍醐天皇の御願造仏であった上醍醐の五大堂の遺仏である大威徳明王像と中院五大明王像の間に横たわる作風の違いについてである。根立氏の理解を踏まえれば（四六頁）、精鋭仏師が御願造仏

を行い、二番手の仏師が中院五大明王像の造像を行ったということになるのか。その二番手の中院五大明王像と安祥寺四天王像のうちの当該二天像が作風において通じるといふことは、安祥寺当該二天像も二番手の仏師の手になるということになってしまおう。同じく御願寺の格を有する安祥寺の工房に官が二番手の仏師を送り込んだということになってしまわないかどうかである。また、安祥寺当該二天像に明確な御願造像の伝承をもたないとなれば、寺家における私的な造像であったような気もするが、もとより安祥寺内の官主導の工房（官営工房）において私的造像が行われたと想定すること自体に無理が生じることはいうまでもない。そのような考えに立つとき、かの醍醐寺の整備期における僧名仏師工房が、一方で国家沙汰の造像を行うとともに、観賢の中院五大明王造像に端的に示される「寺家沙汰」の造像もあわせ行える余力があり、かつ他寺の造像も当該の寺家（この場合は安祥寺ということになる）が、その要請があれば行うという形態にあったと見る余地はないかどうかである。これまで寺院帰属の工房というとき寺内に工房が設置されたという前提に論が構築されてきたが、浅木氏が「興福寺」仏師の議論のなかで言及されたように（概述）門前等の寺外近隣にあって僧名仏師工房が機能していた可能性を視野に入れるならば、根立氏がいう、醍醐寺にあって官の監督を受ける僧名仏師工房のあり方に、興福寺永承罹災時の復興造像にみた定朝工房の経営形態（概述）の淵源を求めることも（四五頁）説得力を増すことになり、かつ、根立氏が十世紀初頭の醍醐寺における僧名仏所工房のあり方を中世仏師の枠組みのなかで捉えようとしたことの視点の確かさがより鮮明となるのではなからうか。

順序がいささか逆になってしまったが、序論の醍醐寺における僧名仏師工房について、第一部の僧名仏師の僧綱位叙位による社会的身分の向上について、第二部の慶派仏師へと展開してゆく奈良の地における「興福寺」仏師の成立について、これら三つの議論を踏まえつつ第三部では「東寺大仏師職」の議論へと移る。

「興福寺」仏師というものが、十一世紀の興福寺における定朝工房の出張所（出先工房）に起源が求められ、成朝に至る文字通り六代にわたって継承がなされ、工房として成長を遂げて活動したのが「興福寺」仏師であったとするならば、これと

は性格を異にしたのが第三部第六章で論じられるところの「東寺仏師職」であった。いうまでもなく、「東寺大仏師職」とは、京都・東寺における仏像の修造にかかわる利権である。根立氏は「原則として運慶の後裔を称する慶派及び七条仏師に連綿と継承されてきた、わが国最大の大仏師職と想定される」(二四九頁)という。本章では従来知られなかった史料を含めて関係史料を博搜し、運慶弟子・湛慶以後、近世に至るまでの東寺大仏師職が慶派仏師によって継承されてきた動向に迫っている。考察に用いられた史料の中心は、東寺執行職を代々勤めてきた阿刀家に伝えられた『阿刀文書』のなかの『拾古文書集』五、および、京都・随心院に伝えられた応永二十九年(一四三二)頃に記された『東寺凡僧別当私引付』の収載史料である。斯界未知の史料が多く含まれることは特筆されよう。そこにあらわれた「東寺大仏師職」は近世に編纂された『本朝大仏師正統系図』諸本や『墨水遺稿』卷三所収の「歴代大仏師譜」などよりも遙かに信憑性が高く、それらの誤りを糾す。ことに『東寺凡僧別当私引付』収載史料を根立氏は「鎌倉・南北朝時代の東寺大仏師の変遷などの東寺大仏師職に関わる諸問題、さらに言えば慶派、七条仏師一門に関わる諸問題を考える上で見過ごすことのできない史料」(二五一頁)と評価する。

その『東寺凡僧別当私引付』の収載史料のなかで根立氏が注目されたのは、いわゆる院派仏師に属する院亮による正中二年(一三二五)十月二七日の「東寺大仏師職」の補任である。この院亮の補任について「東寺の造像や修造を七条仏師の一門が独占的に行なったとすることはできず。東寺大仏師にこれと異なる一門の仏師が補任される余地は認められる」(二五四頁)とするとともに、「寺家側はこの大仏師職を慶派が独占的に相伝することを安易に認めようとはしていなかった」(二五六頁)としたことはきわめて重要な指摘のように評者は考える。院亮の「東寺大仏師職」の補任は『東宝記』が伝える正中三年二月の南大門仁王像の修理に関わると根立氏は指摘する。そして、根立氏はこの補任を「かなり異例のこと」とみる(二五四頁)。仏師性慶が正中三年三月に院亮の「東寺大仏師職」補任の不当を訴え、また、かの南大門の仁王像修造をめぐって『東宝記』の南大門仁王像の項目に「大仏師康譽法眼注進状」が引かれることをかんがみてのことである。根立氏は「大仏師康譽法眼注進状」の存在を重視し、同年三月の性慶の「東寺大仏師職」競望も南大

門仁王の修造権の獲得とともにであったとみなされた(二五六頁)。ただし、上述の『東宝記』の当該記述には「正中二年二月高野證道上人致大勸進仁王三天等令修理天衣加彩色畢、(傍点評者)」とあり修造の完了を明記している。そして、その三月の時点で仏師性慶が申状を提出し、非難の対象は文中にみえる院亮の「東寺大仏師職」の補任に対してであったことを思えば、既に院亮によって南大門仁王像の修理はなされていたとの解釈が成立つ余地はないかどうかである。なお、仏師性慶が正中三年三月に院亮の「東寺大仏師職」補任の不当を訴えた文中に仏師康譽について全く言及がないところから、根立氏は、かの仁王像の修造について「正中三年に勧進が行われた仁王像の修造は、東寺大仏師職の所持者の問題が曖昧なまま康譽が修造に携わることになったのであろうか」(二五七頁)とされた。これは根立氏があげられた『東寺凡僧別当私引付』が仏師康譽の「東寺大仏師職」の補任を暦応元年(一三三八)とすることも考慮してのこととみられる(二七三頁)。

ちなみに、院亮の「東寺大仏師職」の補任に対する仏師性慶申状は、性慶が運慶以来、東寺の修造に尽力し、その弟子・湛慶も造像に携わった西園寺の大仏師の肩書きを有すること(二五五頁)にものをいわせてのことであったようである。一方、「運慶五代孫」を名乗る康譽に関して、運慶門流における系譜が明らかでなく、根立氏が指摘するように「元来、慶派の中では必ずしも主流の立場にあるものではなかった」(二八七頁)ことを認めるならば、根立氏は原則、慶派主流による「東寺大仏師職」継承を認められた訳であるが、寺家側の「東寺大仏師職」の補任は、門地以上に当代における仏師の技量の重視とともに、その補任は一代に限り世襲を認めなかったことが考えられないかどうか。

そうとみると、これに先立つ運慶門流の慶秀と湛雅の補任(二五五頁)について、根立氏が明らかにされたように、かれらは運慶の一門とはいいながら直接の師弟関係にはなく、前者は運慶第六子・運賀の弟子であり、後者は運慶四子・康證(康勝)―康円の流れを汲む湛康の弟子であった。かれらがともに「東寺大仏師職」を得ることができたのも、もちろん運慶の流れを汲むことが考慮の材料となったこととは否定できないが、根立氏がいうように、「湛慶に始まり、慶派、七条仏師の正系」(二九四頁)であるから「東寺仏師職」に任じられたのではなく、その時代に

京都で活躍した実績を寺家側が認めたことという解釈の余地はないかどうかである。さらに当時、運慶一門の他の仏師たちが京都以外での活動基盤を有していたであろうことも考慮されなくてはならないであろう。つまり、中世前期にあつては「東寺大仏師職」が運慶一門の嫡流でなければ相伝できないということではなかつたようにも評者には思える。このあたりが「東寺大仏師職」をめぐる議論の中心になるであろう。なお、かれらがこの「東寺大仏師職」に群がった所以も、根立氏が認識を示されたように、それが東寺における一切の修造に関する利権にからむものであることはいまでもなく、その点において興福寺における「南京大仏師」という意識とはいささか異なるものであつた。

ちなみに、この「東寺大仏師職」は、十四世紀末以降、確かに運慶の流れを汲む七条仏師によって世襲というかたちで継承されてゆく。鎌倉・南北朝期の「東寺大仏師職」の補任のありようから変化していることは根立氏が『阿刀文書』のなかの『拾古文書集』五によって明らかにされた通りである。

ただし、根立氏は依拠された史料のうち、『東寺凡僧別当私引付』の収載史料のなかから嘉禄三年（一二二七）の運慶の息・湛慶の「東寺大仏師職」補任状の存在を明らかにされ、「東寺大仏師職」が十三世紀前半に成立したと結論されたが、これを収載したのが応永二十九年（一四三二）十二月二十九日の年記のある『東寺凡僧別当私引付』に収録された湛慶と康祐という二人の仏師の間での東寺大仏師職をめぐる相論にかかわる訴訟文書の、しかも案文のなかにあらわれたことはいささか気になるところである。

かの湛慶が「東寺大仏師職」獲得のために提出した案文に含まれていた補任状は、嘉禄三年（一二二七）の湛慶、建長六年（一二五四）の慶秀、暦応元年（一二三八）の康誉、それぞれの補任状の写しであつた。何故、そこに湛慶、慶秀のそれが含まれていたかについて根立氏は他の補任状を所持していなかつた可能性に及ぶとともに（二八四頁）、書式が「他の東寺大仏師職の補任状にほぼ準じたものである」（二七一頁）ので問題ないとされたが、逆に、それゆえ作為の余地も完全には排除できない。この嘉禄三年の湛慶の「東寺大仏師職」補任状は「大仏師職に関する史料としても極めて早い時期に属するもの」（二七一頁）であるうえに、かの史料が十四

世紀の訴訟文書の案文のなかに伝えられたことを思うと幾分慎重にならざるを得ず、鎌倉時代の史料をもつての傍証が今後の課題となろう。

なお、これに続いて第三部には附論「康正工房の仏像製作をめぐる――桃山時代七条仏師の工房製作――」が収められる。本書の上梓後に執筆された『室町時代の彫刻 中世彫刻から近世彫刻へ（日本の美術497）』（至文堂、二〇〇七年七月）がこれと密に連動するものであり、併せて一読を勧めたい。

以上、いささか多く評者の思うところを述べてしまつたが、本書をじっくり読んで真摯に本書と向き合つてのことであることを理解いただければ幸いである。本書はこれまでの仏師工房論より踏み込んで、かれらを取り巻く社会との関わりやなかで論を構築したものである。従来、明確に論じられることのなかつた仏師の社会的身分としての僧綱補任の有する意義や、院政期の「興福寺」仏師の実態、東寺における「大仏師職」など、扱うテーマはどれも日本彫刻史研究にあつて重要なものであることは言をまたない。ただし、軽い気持ちで本書を一読するだけでは頑なに読者を寄せ付けられないほどの重厚な内容と議論が氏独自の視点から展開されているのも事実である。しかも、発表後すぐには反論が出ない日本彫刻史研究の現状にあつて、上梓後いち早く麻木脩平氏が反応を示されたように、その内容は日本彫刻史におけるきわめて重要な仏師および工房論であり、後続の研究者は本書を避けて通ることとはできない。それが活発な議論に結びつくものであることを思えば、本書の存在は極めて重要といえよう。本書が平成十八年度の國華賞に選ばれたことも忘れることはできない。

*根立研介『日本中世の仏師と社会―運慶と慶派・七条仏師を中心に―』塙書房、二〇〇六年五月、B5判、四一七頁